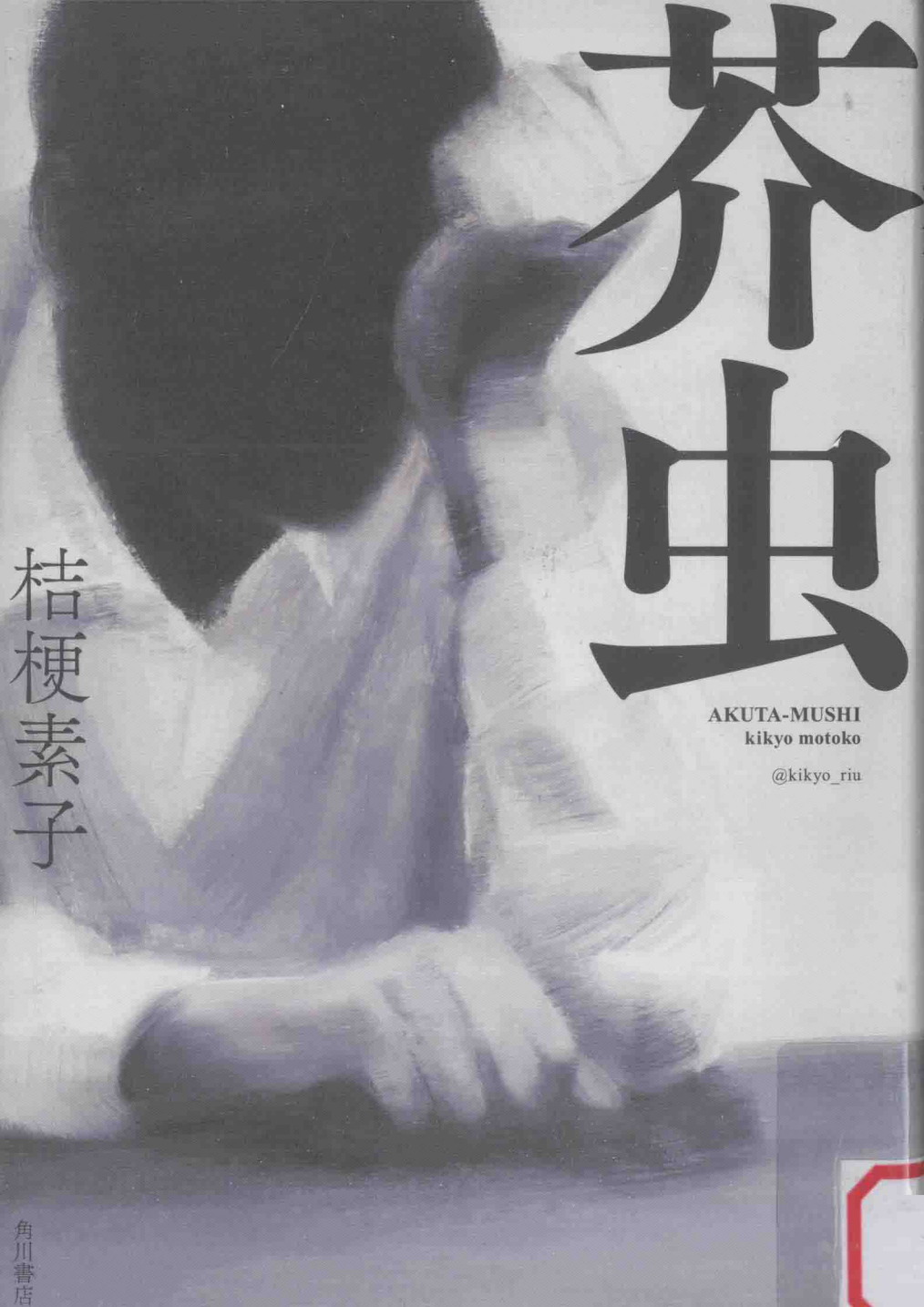




芥虫

AKUTA-MUSHI
kikyo motoko

@kikyo_riu

桔梗素子

介虫

AKUTA-MUSHI
kikyo motoko

桔梗素子

桔梗素子（ききょう もとこ）

女性。第1回角川 Twitter 小説コンテストに応募した本作が、応募総数1697作の中から、最優秀賞を受賞。小説投稿時のペンネームは「桔梗りう」。Twitter アカウントは「@kikyo_riu」。

本作は、第1回角川 Twitter 小説コンテスト最優秀賞受賞作を大幅に加筆・修正し、単行本化したものです。

なお、実際の制度では、結婚や養子縁組などの場合を除き、犯罪者の改名が認められることは殆んどありません。



あくたむし
芥 虫

2014年3月30日 初版発行

著者／^{ききょうもとこ}桔梗素子

発行者／山下直久

発行所／株式会社KADOKAWA

東京都千代田区富土見2-13-3 〒102-8177

電話 03-3238-8521(営業)

<http://www.kadokawa.co.jp/>

編集／角川書店

東京都千代田区富土見1-8-19 〒102-8078

電話 03-3238-8555(編集部)

印刷所／旭印刷株式会社

製本所／本間製本株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに
無断複製物の譲渡及び配付は、著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、
たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。
KADOKAWA読者係までご連絡ください。
（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）
電話 049-259-1100（9：00～17：00/土日、祝日、年末年始を除く）
〒354-0041 埼玉県人間郡三芳町藤久保550-1

©Motoko Kikyo 2014 Printed in Japan
ISBN 978-4-04-110691-4 C0093

芥
虫

装画：小笠原美環〈Sorge 1〉2011年、キャンバスに油彩

Courtesy of the Artist and SCAI THE BATHHOUSE

装丁：坂詰佳苗

赤んぼが親を選んで生まれてくる、という説が正しいなら、それは早い者勝ちだろう。もしくは遺伝子のスベックで順位付けられ、上位から指定できるようになっているのだから。そうでなければ、俺の育った家庭は俺の望み通りのものだったという、恐ろしくふざけたことになってしまう。

脳裏を掠める白いスリッパの腿を牽制し、慎重に妄想を選びながら事を進める。いよいよ迫り来る瞬間のために三号前の週刊誌を引き寄せ、適当なページを開いた。最後は、着乱れたセーラー服の胸へ撒き散らす場面で射精する。噛み殺した声と共に、白濁したものは連載小説の中へと受け止められていった。

妄想も精液も出し尽くせば、妙な罪悪感と滑稽さしか残らない。俺は毎晩、セーラー服にねだられる妄想に耽り、家族に隠れて雑誌へ射精している馬鹿だ。それも今日は、一番尊敬している作家のページだった。

そこを再び開いてみる勇氣はなく、汗を拭いながらパンツを穿く。何事もなかったかのように、リサイクルの袋へ雑誌を載せる。ふと気になって四日分ほどの新聞を抜き取り、

その下へ忍ばせる隠蔽工作をした。

妻が妊娠し出産して、そのあと事件があった。世界滅亡の恐怖どころか、新世紀突入の余韻すら消え失せた中途半端な頃だ。夢や希望という未来のものが悉く白けて、日常は情性と諦念による平穩で維持されていた。誰もが何かを悟ったような顔をしていた。恐らく俺も「あの日」までは、同じ顔をしていたはずだ。

あれから五年、一度も妻を抱いていない。しばらく嗅いでいないと敏感になるのか、妻は俺の事後ティッシュを見逃さなかった。別に私としろって言ってるわけじゃないけど、と目の前で摘んだそれを見せられるのは、あまり気分の良いものではない。

五回見つかって新聞の風俗欄が気になりだした頃、古雑誌の中へ射精する策を思いついた。しごきながら片手で準備する格好は間抜けだろうが、こうしてからは妻の鼻も落ち着いている。饅えた臭いはインクに上手く吸収されるらしい。

ゴムの伸びたパジャマのズボンを穿き、そつと襖を開けて妻と娘の様子を探る。ほの暗い灯りの端に、手鞠ほどの小さな娘の頭が見えた。旋毛は隣で眠る妻と似て、俺より少し後ろの方にある。

どうせなら旋毛が俺に似て、顔が妻に似れば良かった。俺にとつては確かに「愛娘」だが、世間一般の美醜基準に照らし合わせてみれば、残念な部類の造作だ。眠たげな奥二重に低い鼻、主張の激しい分厚い唇と濃い眉毛。生まれ月に咲く種のジャスミンにちなんで

「茉莉」と名づけたが、少し酷だったかもしれない。

妻ははつきりした二重と程良く高い鼻を持っている。唇と眉毛は凡庸なものだが、まともに見れば美人と呼ばれる顔だ。年頃に上手く妻の遺伝子が目覚めてくれることを祈らざるを得ない。娘には謝りたいことばかりだ。

一層募った罪悪感に、溜め息をついて襖を閉じた。すっかり冷えた肌をさすりながら、片隅に敷いた布団へもぐり込む。長く垂らした紐を引き、照明を落とせば蛍光緑の残像が暗闇に浮かぶ。目を閉じてでもこびりついたまま離れないその憎々しさを味わいながら、涙を啜った。

娘を来年から幼稚園に入りたい、と妻が切り出したのは、一月ほど前のことだ。本当は三年保育で入れたかったところを二年我慢して一年にしたのだと言う。俺は妻のそんな葛藤を全く知らなかったせい、か、ああそう、と気の抜けた返答をした。それが癪に障ったのか、妻はこれまでの鬱憤を晴らすかのごとく俺に迫った。公園で遊ばせてやりたいけれど連れて行けるのは人の捌けた夕暮れだ、とか、ストレスが溜まらないよう毎日の家遊びを工夫している、とか、本当は同じ年頃の子供達と思う存分遊ばせてやりたい、とか、このままだと上手くコミュニケーションが取れない子供になってしまうかもしれない、とか、他にもあったが全ては覚えていられない。

妻は「知られないこと、知らせないこと」を最重要課題にして暮らしている。近所づきあいは最低限、情報網を警戒して町内会には入っていない。俺が飲み会禁止なのも、酒を飲んでうっかり口を滑らす危険を回避するためだ。それが俺のためではあるし、元はといえば全て俺のせいでもある。

事件後すぐに動いてくれたのは妻だった。弁護士を雇い、「妻の妊娠出産で夫婦生活が少なくなり、欲求が溜まっていて魔が差した」という情けない理由を切々と手紙に綴って向こうの親へ訴えようとしてくれた。罰金刑を食らった俺を励まし、慰め、改名を勧めてくれたのも妻だ。

その時の俺は「痴漢」という罪の重さに押し潰されて、ただ泣くことしかできなかった。報道されたのは高校名と「男性教諭(30)」だけだったが、それだけ出れば地方では充分だ。俺は、すぐ有名人になった。上は謹慎で済ませようとしたが、耐えられなくて依願退職をした。「若いのに進路指導に秀でた教師」という俺の栄光は、その日砕けたまま散らばっている。

その後も、周囲の視線と噂話は容赦なく俺達を追い詰めた。増してゆくばかりの憔悴に、脱出を決めるまで時間はかからなかった。そこそこの多い都会の片隅を選び、渋る義父母を保証人にしてアパートを借りた。家裁へ申請した改名は数週間で受理され、俺の名前は母親のつけた「大牙」から、妻の選んだ「大河」へと変わった。過去から少し離れるこ

とができた、記念すべき日だった。

その名を持って、いくつかアルバイトの面接へ向かった。履歴書は賞罰欄のないものを買いい、それが必要そうな会社は避けた。学歴を高卒へ変え、職歴は妻のものを借りて学校事務をしていたことにした。もし何か聞かれた時に全く知らない職業では困るだろう、という妻の配慮だった。

履歴書と交互に向けられる視線に怯えながらの面接は、当たり前だがなかなか芳しい成果に繋がらなかった。それがまた俺の何かを繰り返し踏みつけて、惨めにしていた。

そんな自信喪失の中、あんだ真面目そうだね、と採用してくれたのが社長だった。先代と二代で築き上げた貴金属製造の工場は、小さいながらそこその利益を上げているらしい。俺は「ワックス検品係」になった。

それから四年経ち、最初は簡単なものしか任せられなかった作業も、種類が増えて忙しくなった。コツや速度を身に付けて、精度も上がった。四人いる係の中では俺がトップだ。一人寡黙に取り組む時間が、今は苦にならなくなっていた。

今年の十二月十日で、俺の罪は消える。ひたすらに怯え続けた五年がようやく終わる。当時の奔走を妻に恩着せがましく言われたことはない。一度尋ねた時、茉莉を守ろうと必死で、と答えたそれきりだ。なんとなく、俺のためじゃなかったのか、と気落ちしたのを覚えてる。

だからなのか、あなたは茉莉のこと何も考えてないのね、と迫られた時に思わず、お前だって俺のことは何も考えてないだろう、と言いつ返してしまった。俺になんでもかんでもしたみたい茉莉にもすればいいだろう、と続けてしまった。次の瞬間、気まづくなって顔を逸らしたが、恐らく妻は傷ついていた。

謝り損ねているうちに、三週間近く経っていた。その日、妻は娘を連れて、希望する公立幼稚園の入園説明会へ行つて来たらしい。どことなく表情は強張っていたが、噛みついてくるようなことはなかった。手渡された資料を申し訳程度に捲りながら、いいんじやないか、と視線を上げると、蛍光灯の下で影を作る妻の顔があった。

今日のために染めたい髪に白髪は見えなかったが、いつも通りのひつつめ髪で、美容院へ行った気配がない。灯りのせいで瞼の下へ影ができ、目の辺りは妙に垂れて見えた。昔は瑞々しく張っていた頬も萎んでいる。俺の好きだった尖った顎は、なんだか丸く、平たくなつてしまつていた。

短大新卒の妻が職員室へ挨拶に現れた時、独身男共は色めきたつた。しかしそれは、無言で、だ。大体、口に出して下世話な感想を述べ合うのは、大して狙つてもいない、距離のある時だ。その証拠に既婚者や女共は、妻が退出した途端、かわいいだの綺麗なだのいい子が入ってきただのこれから楽しくなるだの、好き放題の感想を並べていた。その一方で独身男共は平然を装いながら、しかしお互いの思惑は気になって、どうよ、どうつて何が、

何がつてさっきのがよ、と探り合つた。お互いの脳内で敵のスペックと自分を比較し順位をつけるまで、それほど時間は掛からない。俺は、一番に大きく水をあけられての二番、と自分を評価した。

一番は二つ年上の地理教師で、とにかく見た目のいいヤツだった。その上女の扱いも手慣れていて、女子は大抵こいつが好きだった。有名ブランドのものではなさそうなのに妙に服や持ち物のセンスが良かった。どこで買ってるんすか、と聞けば、聞いたこともないシヨップ名を二、三個挙げた。散髪は美容院で、フランスの車に乗っていた。

俺がヤツに勝っているのは、学歴と学校や保護者からの評価だった。俺は旧帝大卒で、受け持ったクラスは成績が大きく上がっていた。校長や教頭からの評価も高く、個人懇談では保護者に感謝されることも多かった。

三番にした奴は俺の同期だ。学歴も見た目も並で、取り立てて素晴らしいところもない。生徒受けは良かったが、俺から見れば迎合しすぎの、ただそれだけの奴だった。

ヤツをあの手この手で出し抜いて半年経つ頃、妻はようやく俺のものになった。そこまですんだから大切にしろよ、とヤツは皮肉っぽく言つて、一服のために消えていった。煙草嫌いな妻へ少し大げさに伝えたのがばれたのかもしれない。ヤツは今頃、どんな女と暮らしているのだろうか。

おとうさん、と繰り返す声に目を覚ませば、覗き込む娘の姿がある。生返事をするとう度は、おはよう起きてよ朝よ、と妻の口真似をして、満足したように台所へ向かった。

布団の中で軽く体を揺すり、のびをして腰を起こす。目の前の長押しには、アイロンを終えたワイシャツと作業服が掛けてあった。上は二着目だが、下は三本目だ。事件前に腹の辺りでだぶついていた肉は、この数年ですっかり落ちた。二十キロ近く痩せれば人相も変わる。妻は、これではれにくくなった、と喜んでいた。

身支度を済ませて食卓に着くと、娘が飯茶碗を運んでくる。ありがとう、と言えば、どういたしまして、とませた口を返す。息子に比べて娘は口が達者になる、という話を聞いたことがあるが、蓋しその通りだろう。尤も、俺に娘がいる、というのは、面接で社長にしゃべったのが最後だ。

「今日、願書を出しに行こうと思うの」

汁碗はさすがに任せられなかったとみえて、妻が運んできた。

「午前中に市役所で住民票を取って、そのあと願書と一緒に出してくる」

頷いて応えた俺へ、予定を確認するように告げる。娘が、幼稚園行くの、と聞くと、妻は、来年からお願いますって言いに行くのよ、と嬉しげに答えた。

だし汁でずしりと重い玉子焼きは、妻の得意料理の一つだ。箸で割れば、ほろりと巻きが解れて湯気が浮かぶ。飯の上へ載せて掻き込めば、程良い塩加減で飯が何倍も旨くなる。

卵料理といえど「不必要なほど甘いスクランブルエッグにケチャップ」だった俺に、この味は衝撃だった。

汁椀を傾けて、豆腐と春菊を口へ流し込む。嚙むほどに拡がる春菊の香りを、俺は結婚するまで知らなかった。食欲を満たすもの、以上の何かを、俺は食事に得たことがなかった。

「旨かった、ごちそうさん」

全てを平らげて手を合わす。妻は娘の動向から視線を移し、笑顔で、ありがとう、と言った。その表情は今も悪くない。

歯磨きを終えて玄関へ向かえば、娘が奥から駆けてくる。いつてらっしゃい、と言われながらじゃれつかれるのも、嫌な気はしない。いつてきます、と声を掛ければ、必ず奥からも返答があった。

たたきの隅へ出されていたリサイクル袋は、捨てやすいよう紐で括くくられている。俺はそれを提げ、もう一度娘に挨拶してから家を出る。馬鹿な俺の痕跡こんせき一塊と古紙回収コンテナで決別し、晴れ晴れと仕事へ向かった。

痴漢で捕まった男のその後としては、充分すぎるくらい恵まれているはずだ。

隣室で唸うなる機械の音を聞きながら、ブースで作業を始める。今日最初の作業は爪のある

リングの検品だ。トレイへ盛られた一つを手に取り、見つけたアラから修正を始めてゆく。最初は使い道すら分からなかったツールを手早く、慎重に動かしてゆく。ワックスの段階ではすぐに直せても、金属になつてからでは難しい箇所がある。やがて融かされ消えるものではあつても、ここで手を抜くことは許されない。俺の見落としが今後の作業に影響を与える、という責任は重いが、同時に自負を生み出していた。それは久しく得たことのなかった感覚であり、手応えだった。

昼飯は近くのコンビニか弁当屋で買って、一人、公園で食う。雨なら工場の裏で食う。弁当持参にしないのも、妻の情報統制に拠るものだ。俺は「家庭持ちかどうかくらいで何がばれるというわけでもない」という考えだが、妻は「どこからどうばれるか分からない」という考えだった。

それほど慎重に神経質に外を恐れ避けていた妻が、娘を幼稚園に入れようとしている。少し間を置き、コロツケの下敷きになつていたスパゲッティを掻き込む。脂にまみれた口元を拭いながら、謝罪のきっかけを探した。

花やケーキも好きだろうが、恐らく俺がそれらを買つて帰るというその行為は気に入らないだろう。職場の誰が見ているか分からない、近所の誰かが勤めているかもしれない。妻はとにかくそういうことを気にしてしまう。結局、自分のものを買う振りをして自販機でジュースを買う、くらいしか思い浮かばなかった。

午後の業務開始十分前になったのを確認して、弁当の殻を始末する。裏口辺りでたむろしている喫煙班の横を通りかかると、妊娠した嫁に禁煙を迫られている、という誰かの嘆きが聞こえた。臭いんだからやめちまえ、と心の中でついた悪態は誰にも聞こえない。ドアをくぐり一足先に持ち場へ向かう俺を、張りのある社長の声が引き止めた。

振り向くと、相変わらず額も頬も色艶いろつやの良い社長の隣に、見たことのない若い女が作業服を着て立っている。新人かと訝いふかったが、社長の話によるとCAD担当の人間らしかった。「参考に、検品作業を見学させてくれって言っただけど、いいかな」

「お願いします」

社長の言葉に続き、若い女は頭を下げた。よく見ると胸ポケットに名札が挟んである。江藤えとう、というらしかった。

「別に、僕じゃなくても」

俺は気乗りしない表情で返す。精一杯「迷惑」を表現したつもりだった。

「一番よく分かってる奴が いいんだよ」

しかし社長は決定事項のように重ねて踵かかとを返す。困りますよ、と投げた言葉は戻って来た連中の喧騒けんそうに遮られて届かなかった。俺は小さく舌打ちをして、江藤を睨にらむ。しかし江藤は、これだけ不快感を表現したにも拘かわらず、少しも響いていない様子で笑った。面食らうと同時に、冷たいものが背筋へ走る。いや、こいつが「俺」を知っているはずはない。

形勢を逆転できないままブースへ向かう俺のあとを、江藤は、お願いします、と繰り返してついて来た。

見た目は、こんな仕事に勤まりそうな風ではない。頬は「おてもやん」のように塗られていて、唇は不必要なほどに赤かっている。目の周りは、黒々としていた。放射状に広がる睫毛はウニのトゲのようだ。帽子を被らせたロングヘアは茶色で、ドリルスクリューのごとき回転が掛かっている。右へ行き、左へ行きとする度に、咽せそうな甘ったるい匂いが拡散する。マスクをしていなければ嗅覚が麻痺していただろう。

しかし俺にとっては、こういう「清楚」からかけ離れたタイプの方が抜きやすい。余計なことを気にせずに使い倒せて、済んだからの後悔も少ない。久し振りにセーラー服から離れて、上司とOLとか、その辺りで使えばしばらくはいけそうだ。

「路村さんで、何歳なんですか」

一通りの説明を終えその尻を見下ろしていた俺は、不意の質問に視線を上げる。顔だけ振り向かせた江藤は、マスクに隠れない目元のウニをばさばさと羽ばたかせた。

「仕事に関係ない」

「会話って大事ですよ」

「仕事に関係のない会話は必要ない」

「でも、仕事の話するのでも、相手の思考の傾向が分からないと『こういうことが言いた